

## 序文

日本版環境優先度指数 JEPIX: Japan Environmental Policy Priorities Index が公表されてから、すでに 10 年弱が経過した。この間、企業の環境マネジメントの進展は著しく、グローバルな地球環境問題への対処とローカルな地域的公害問題の緩和は、飛躍的進展を示した。京都議定書以来、地球温暖化の緩和に向けての各国間の合意が形成されつつあるのも、喜ばしい事実である。

しかしながら、2009年12月にコペンハーゲンで行われたCOP15において見られたように、先進国と途上国の間の地球環境問題、とりわけ緊急の問題である地球温暖化阻止に関する認識の違いにはなお著しいものがあり、実質的に意味のあるグローバルな合意はまた先送りされてしまい、ほとんど意味のない空疎な形式的合意がなされるにとどまった。

今年アメリカでは共和党政権から民主党政権に政権交代が行われたが、環境問題解決に関するアメリカの煮え切らない態度はあいかわらずである。内容空疎な威勢のよい姿勢表明は発するものの、実行は皆目不明であり、京都議定書の先進国グループの一員としての責任と義務を果たすようになるのかどうかは、なおさら未定である。そして、もう一方の環境汚染超大国である中国は、資源がらみで戦略的に大量の資金を投入してアフリカ諸国を無理やり動員して、コペンハーゲン合意の粉砕に多大の貢献をした。このような米中 2G の、自分の国さえよければ構わないという、国際的に許されない無責任極まりない態度は、今後の地球環境問題の緩和と解決に、引きつづき暗い影を投げかけている。

このような国際情勢において、ドイツやスイスなど EU 諸国とならんで世界の環境先進国のリーダーシップをとる日本の役割は、いまや限りなく大きい。わが国における環境マネジメントの理論的実務的進展は、今後の世界の環境マネジメントの趨勢に決定的に大きな影響を与えることであろう。いや、そのようにならなければいけないと信ずる。本モノグラフに展開される JEPIX 環境インデックスの資本市場への応用的実証研究も、このような流れの中で、わが国環境マネジメント発展の一助となれば幸いと考える。

今回のモノグラフにおいては、小生が副会長をつとめさせていただいている環境経営学会 (Sustainable Management Forum、会長：山本良一東京大学教授) のグリーン資本市場委員会 (委員長：廣瀬忠一郎、元キャノン社財務・環境担当部長、現国際基督教大学 ICU 講師) における活動を収録した。グリーン資本市場委員会の長期にわたる息の長い活動は、わが国における産学協同のきわめてユニークな活動であり、ICU の受託した文部科学省「平和・安全・共生」COE 研究プログラムの研究成果を継受するとともに、ICU でポスト COE 研究として継続されている、企業環境報告実証研究のバックボーンとなる存在でありつづけたものである。

この委員会をここまで指導して導いて下さった廣瀬委員長に深甚な感謝の意を表明するとともに、委員会の全部の議事録を作成し再構成していただくという、まことに膨大にし

て根気のいる作業を遂行して下さった黒田邦夫氏（日本環境認証機構）には心から深甚なる感謝の意を表明したい。また、いつも知的な刺激に満ちた議論を提供しサポートして下さいました委員会メンバーの皆様と環境経営学会に、ここにあらためて感謝の意を表明したい。

さらに、ICU 現役学生・大学院生を主力とする ICU 実証研究プロジェクトを、ここ5年ほど一貫して「現場監督」として、稀にみる優れたリーダーシップにより粘り強く指導してくれた東健太郎君に、心より感謝申し上げる。同君は、ICU 社会科学科を最優秀な成績で卒業ののち、早稲田大学（大隈奨学金授与）と一橋大学を経て、ドイツ最高の評判のマンハイム大学経営大学院で博士号を取得した。現在、ICU、法政大学、獨協大学などで教鞭をとるが、このたび2010年4月より立命館大学経営学部にて准教授として奉職することが決まった。同君を慕う多くのICU学生諸君にとっては大きな痛手であり、同君を惜しむ声が学内に渦巻いているが、今後の同君の学者としての大成を、これまで研究に協力・従事したICU学生諸君らとともに心からお祈りする次第である。

本モノグラフの最初に収録されている英文論文は、東君の指導監修のもとに佐久間朋樹君（国際基督教大学大学院行政学研究科）によって苦勞して英訳されたものである。佐久間君の勞苦を讃えるとともに、同君が今後公認会計士試験に合格して、良き職業会計人になることを祈る次第である。

なお、本モノグラフには、JEPIX 創成期から JEPIX 創造のために中心となってリーダーシップをとられ、その後 COE/JEPIX 研究の開始当初からお世話になった熊谷敏教授（東京都市大学、旧武蔵工業大学）に、論文の転載寄稿と英訳をお願いした。寄稿していただいた論文は、このモノグラフシリーズでも東健太郎氏がとりあげた「虫食いだらけの環境報告」を「非開示環境負荷ペナルティ係数」によって「完全な環境報告」にし、さらに、企業に環境報告推進へのインセンティブを付与する、という画期的なアイデアである。次世代環境報告の本命と考えられる熊谷教授のこの「ペナルティ係数」によって、JEPIX を使用するグリーン資本市場創造が飛躍的進展を見せるのではないかと、大いに期待するとともに、英文論文によりこの考え方の国際的展開が図られることをお祈りする次第である。

最後になって恐縮であるが、本年度モノグラフにおける研究（転載論文を除くすべて）は、平成 21 年度アサヒビール学術振興財団研究助成の研究成果の一部であることを記し、ここにアサヒビール学術振興財団に深く感謝の意を表明するとともに、あわせて本モノグラフ完成出版まで本研究を本年度助成して下さいました国際基督教大学社会科学研究所 (SSRI) に感謝の意を表明する次第である。

2010年3月

国際基督教大学教授 宮崎修行